第23回日本水大賞　応募用紙

（整理番号：　　　　　　　）

活動の名称	ジョウ･カリュウジュウミンノコウリュウニヨルチイキレンケイガタデシゼントニンゲンノキョウセイヲメザスドラゴンリバーコウリュウカイ 上・下流住民の交流による地域連携型で自然と人間の共生を目指すドラゴンリバー交流会									
記入年月日	活　動　主　体					活　動　分　野				
2020年 7月7日	該当する活動主体に〇（1つまで）					主な活動分野に◎（1つまで） その他関連する活動分野に〇				
	学校 （　）	企業 （　）	団体 （〇）	個人 （　）	行政 （　）	水防災 （〇）	水資源 （〇）	水環境 （◎）	水文化 （〇）	復 興 （　）

活動主体の概要

活動主体の名称	フリガナ　トクテイヒエイリカツドウホウジン　ドラゴンリバーコウリュウカイ 特定非営利活動法人　ドラゴンリバー交流会		
代表者名（団体の場合）	フリガナ　ヤマダ　ケンイチ 山田　賢一	設立年月日	（設立）1995年8月6日 （特定非営利活動法人認定）2002年3月28日
所 在 地	フリガナ　　フクイケンフクイシタナイケ２チョウメ３０５ 福井県　　　　　　福井市		
主な活動地	福井県嶺北地方　九頭竜川流域		
組織の概要	社員２７名、団体会員５０団体、個人会員２９名 理事長１名、副理事長２名、専務理事１名、事務局長１名		

応募活動の概要：
ドラゴンリバー交流会の活動は、九頭竜川流域における水環境の保全を目指し、「水を創り、水を活かし、水と生きる」を理念に、ドングリ（コナラ・クヌギ）の植樹、河川の清掃、川流れやカヌーなどの川遊び、水生生物調査などのイベントを通じ、上流･下流住民の交流活動を行ってきた。また、福井市治水記念館の指定管理者として河川行政や水防災についての広報業務や、国土交通省九頭竜川防災センターにおいて九頭竜川水系の治水･利水･環境・防災や鳴鹿大堰に関する説明・広報を行っている。当会は平成２６年３月に近畿地方整備局の河川協力団体として指定を受けている。

応募活動のアピールポイント：
・地域住民・協力団体と協働で、山に広葉樹系苗木を植樹、河川の清掃活動の実施。
・親子で河川環境の調査を行い、川流れやカヌー等の川遊びで川に親しむ活動の実施。
・各地で水災害が多発してきており「逃げ遅れ０」を目指すマイ・タイムライン普及活動の実施。

これまでの受賞歴：
Ｈ19　地方自治法施工60周年記念表彰(総務大臣)　　Ｈ20　第19回緑の愛護功労者表彰（国土交通大臣）
Ｈ24　河川愛護等功労者表彰（近畿整備局長）　　Ｈ25　ダム建設功績者表彰（日本ダム協会）
Ｈ29　河川功労者表彰（日本河川協会）
※日本水大賞における
　　これまでの応募実績は「無し」：

「日本水大賞」をどこで知りましたか？（数字に〇印を付けて下さい）
１．新聞広告　②．官庁内ポスター　③．日本河川協会ホームページ　④．水大賞事務局からの案内
５．国の機関からの誘い　６．県・市町村からの誘い　７．教育関係機関
８．日本河川協会ホームページ以外のインターネットの情報　９．その他（　　　　　　）

活動の概要

目的：九頭竜川は、幹線流路延長116㎞、流域面積2,930㎢の北陸地方屈指の大河川である。この地域を代表する「母なる川」として、古くから人々の生活と密接な関りを持ち親しまれてきた河川である。かつて、これらの河川は交通路であり、水運とそれに関連する生業を媒体として上流と下流の人々は深く繋がり、川を軸とした流域の文化圏が形成されて来た。しかし、社会経済活動等の変化により流域文化圏が崩壊し再構築が必要となってきている。山に降った雨は森を育て、森から流れ出る水は田畑を潤し、飲み水を提供し川となって海に流出する。海に流出した水は魚等、海の生物を育て、再び蒸発して雲となり雨となって地上に降って来る。この循環系が規則正しく維持されることにより、地球の循環系も維持されるのである。流域は地球の縮図という視点で川を軸として考え、行動しようと言うものである。

したがって、ドラゴンリバー交流会の活動は、流域の一体化を図り災害に強い自然豊かな活力ある地域づくりを行い、すばらしい水系環境を構築し次世代に引き継ぐことを目指し、自然と人間との共生を基本理念として豊かで潤いのある水系環境の保全と創造を図ることを目的として活動を行っている。

内容：これまで、ドラゴンリバー交流会発足以来「水を創り、水を活かし、水と生きる」を理念として、水源地環境保全の取り組みでは、どんぐりの森を育てるためクヌギ・コナラ等の樹木を会員が育苗し源流の山に植樹を行っている。また河川の清掃や各種のイベント等を通じて、上下流の交流を深め、講演会やフォーラム等を開催し、九頭竜川流域のすばらしさを再認識する等、活発な活動を展開した。特に1996年1月19日には九頭竜川流域の24市町村（当時）の首長が一堂に会して、九頭竜川流域サミットが開催され「災害に強い流域づくり」「自然と人間が共生する流域づくり」「上・下流の交流による地域連携型の流域づくり」をテーマに活発な意見交換が行われ、ドラゴンリバー交流会の活動に対して流域全体で支援し行政と一体となって活動していくことが確認された。大野市が水源涵養や自然公園とするため平家平のブナ林を購入した際には、ドラゴンリバー交流会から感謝状を贈呈するとともに、募金活動を行い大野市や和泉村（現在は大野市）に寄付を行った。1997.1.2ロシア船籍タンカー「ナホトカ号」が三国沖に漂着し流出し重油が大量に押し寄せた際には、ドラゴンリバー交流会の会員が米･沢庵・梅干を持ち寄り、海岸の清掃活動を行っているボランティアに対して公民館で炊き出しを行った。

現在の活動としては、**水源地涵養植樹**では日野川の桝谷ダム上流や真名川ダム上流の笹生川沿い、福井豪雨で土砂災害にあった旧美山町折立地区では災害を忘れないために「ふくろうの森」植樹を、足羽川ダム工事現場近くでは環境保全植樹を行っている。**河川清掃**では当会が旗振り役として、大野市の真名川や勝山市、永平寺町、福井市の森田地区、中藤地区を流れる九頭竜川で、その他、福井市の市街地を流れる桜の名所として名高い足羽川では、流域住民と企業、団体が一緒になって春の清掃を平成７年から行っている。**川に親しむ試み**では地区公民館事業と協働による**川流れ・カヌー等の川遊び体験や水生生物調査、ミズベリング「水辺に乾杯」**では、ドラゴンリバー交流会が漁協、地元酒蔵、大学、鉄道会社、地元行政に呼びかけ一緒になって、鳴鹿大堰湖畔で開催している。昨年から九頭竜ダム湖畔でも開催している。平成２９年度から、新しいテーマ「減災」に取り組んでいる。**水災害から命を守る「逃げ遅れ０」を目指した「マイ・タイムライン」の普及活動**である。近年、各地で大きな災害が発生し、多くのいのちが失われている。平成１６年７月の「福井豪雨」の際にも避難しない人が多くおり、是非、福井でも普及させたいと考えたのが、水防災意識社会の構築に向けて広報する新事業の出発点となった。これまで福井市で第一回水防災講演会を開催、福井市自主防災連絡協議会関係役員、福井県防災士会員、当会会員が参加し「鬼怒川流域住民のマイ･タイムラインノートの取り組み」と題して行った。この講演会の参加者である日野川と江端川合流点地点で水害に悩まされている新種池地区でのマイ･タイムライン検討会開催を依頼され、参加者と水災害時の個人の行動基準、及び地区としての住民避難はどうあるべきか議論し理解を深めた。その際には福井県防災士会にも参加を呼びかけ、アドバイザーとして参加者のサポートを行っていただいた。その他、福井市舞屋地区の検討会、福井市清水北地区の研修会、敦賀市三島・津内地区の検討会、坂井市・あわら市の講演会を国、県、市や地区住民の協力のもとに行い広がりを図っている。

ちなみに、令和元年度においては、九頭竜川に親しむ会等「水系環境の普及啓発活動」10事業、川の清掃活動等「水系環境の保全と創造に関する交流事業」6事業、水生生物調査等「水系環境の調査研究事業」2事業、マイ・タイムライン講演会等「水系環境に関する広報事業」5事業、計23事業で約13千人の参加を得た。

活動期間	自　１９９５年　８月　～　至　２０２０年　８月（通算　２５年　　　ヶ月）

上記の期間以前から一部の活動を実施していた場合はその期間と内容を下に記入して下さい。

活動の必要性・緊急性：下流域は上流域の保全によって守られている。上流の森を破壊すれば洪水が多発し飲料水が枯渇する。人間は水の循環を無視しては生きられない。流域は生命の水循環を核とする運命共同体である。流域を一つの運命共同体と見なし上流から下流までの人々が自然と人間の間に共生と循環系を確立した生き方を構築する必要がある。我々人間は、川への感謝の気持ちと自然に対する畏敬の念を持たなければならない。そのためには川を美しくし、川に対する正しい科学的知識を知る必要がある。近年、これらの認識が薄らいで来てしまっており、復活させる必要がある。人々が川に接する機会をつくり自然のメカニズムの知る機会をつくる必要がある。

したがって、ドラゴンリバー交流会はこれまで、流域の住民らとともに講演会やシンポジュウムを開催し、広葉樹の育苗・植樹や河川の清掃を行い、上・下流の交流等を行っている。子供たちには、川の楽しさや怖さを知ってもらうために、水に接する川遊び体験や水質調査・水生生物調査を実施している。

活動の効果・社会への波及効果：流域の各地において、これまで水を創る活動の一環として、25年間で植樹した本数は記録に残っているだけでも、32,000本、苗木の提供が1,100本ある。木の種類はミズナラ、クヌギ、サクラ、コブシ、カエデ、トチ、モミジ、ケヤキ、コナラ、スジダイ、シラカシ、シイ、シバグリ、アベマキの苗木を育て植樹を行った。当初の頃は木を植える団体は、ほとんど無い状態だったが、現在では多くの市民団体が木を植える活動を行うようになってきている。これもドラゴンリバー交流会の活動が社会への波及効果のきっかけとなったのではないだろうか。足羽川河川清掃は平成７年から小規模で行ってきたが、今では地域住民だけで無く沿線の会社や各種団体が協力してくれるようになり、毎回1,000人～1,500人が参加してくれるようになった。清掃エリアについても、当初は足羽川堤防の桜が満開になる花見シーズンの前に周辺を清掃しょうと呼びかけたのが始まりだが、現在では６．５キロの区間で行われるようになっている。この他、九頭竜川中流域でも当交流会の呼びかけで清掃を行うようになり、上流の大野市、勝山市でも行うようになってきており、上流から中流域まで繋がってきている。

活動を実施する上での留意点、工夫された点、苦労された点：活動を展開するうえで、当初は既に活動している団体を繋ぎ、連携して活動することにより目的を達成することを考えていたが、最初、そのような活動している団体はほとんど無く、まず地区や各分野のキーマンになれる人材を探し出し、ドラゴンリバー交流会の理念・目的を説明し、まずそれを理解していただき賛同を得ることからはじめた。そのキーマンを中心にネットワークを形成し事業を展開している。

苦労面では事業費の確保と会員の高齢化である。設立当初は会員も多く、行政も色々な面でバックアップをして頂いたが、近年は会員の高齢化や減少が進み、事業費の確保等の課題が発生して来ている。したがって事務局経費の削減や事業項目の削減、他事業との連携による事業費を押さる行動展開を行うとともに、新たなニーズも踏まえた現状にマッチした活動の展開を行っている。

活動の今後の計画：これからの日本の夏は、気温・降水量ともに増加し、豪雨・台風・渇水等の異常気象が多発してくるものと思われる。一方、高齢化社会が進む中、高齢者の独暮らしや高齢者世帯が増えてきており、災害弱者を地域で支える体制づくりを確立していく必要がある。我々、河川協力団体のドラゴンリバー交流会としては、行政と地区住民とのパイプ役となって、マイ･タイムラインの普及等、住民の危機意識の向上を図っていく。これまで進めてきた事業も含め、次世代において何に重点を置いて活動すべきなのかを見直しながら、事業展開を図っていくとともに、併せて上･下流地域の交流を一層推進して行きたいと思っている。会員の高齢化が進んでおり、世代交代が出来るよう壮年・青年層の会員を増やすことが重要と思われるため、広報活動やカヌー等、楽しみながら参加できる事業を展開して行きたいと思っている。新たな事業費の確保については、目的を公開し一般国民から寄付を募るクラウドファンディング等の方法等も検討していく。

応募推薦者

氏　名	宮本　久仁彦	推薦の言葉　：当会は、九頭竜川流域において上・下流住民の交流や住民と行政との交流、河川環境の保全、河川利用の推進や防災の啓発等、幅広い活動を25年にわたり実施してきた。これらの活動は、豊かで潤いのある安心安全な暮らしや、自然豊かな地域づくりに貢献しており、水大賞に推薦するものである。
所　属	近畿地方整備局 福井河川国道事務所長	
氏　名	中村　保博	推薦の言葉　：平成16年福井豪雨の復旧工事等により人々の足が河川から遠のくなか、当会は「まちなか足羽川会議」に参画し、河原での賑わいづくりや地域と連携した春夏の草刈・清掃活動等に長年取組むことで、川を再び身近な存在とすることに寄与した。これらの活動は、水のある地域づくりに貢献しているので、水大賞へ推薦いたします。
所　属	福井県　副知事	